兵庫県佐用郡上月町の方言語法

鎌田良二

方言語法を記述するに当り、その地の方言形を記述するに最適な方法というのと、他の方言形を持つ地との比較するためのものとがある。

前者は、例えば、意志を表わす形は、行コーのように意志の助動詞「ウ」を融合してしまっているので、未然形＋ウ　というより、意志形とか志向形という形を特に立てた方がよいとか、あるいは、仮定の形は、書イタラであって、連用形＋タラであらわし得、命令の形も、ハヨ書キ、のように連用形で命令を表わすので連用形の用法の一種とみてもよいというような場合。さらに、仮定形は、書キャーのように助詞を融合してしまっているので助詞の仮定形と言うよりも、仮定表現形式という方がよいと思われるような場合など、融合形や活用形の一部を欠き対比する形のないもの。

後者の他の地域との比較というためには、なるべくその一地点独特の形式をとらず全国公約数的な形をとることになる。全国的でなくても少くとも近畿、あるいは西部という或る程度の広がりに共通する対比形をもつものであり、分析的であるものとなる。

この二つはやがて全国比較をしなければならないのであるから、前者から後者に向うようし向けることが大切であろう。

全国方言を記したものには、「方言学辭座」（明治書院刊・全五巻）がある。が、これは各府県別に執筆者が異り、各府県別に見るのには都合がよいが、その方言語法の記し方も各自思うように記されているので横の連絡がない。

これに対して、執筆者はそれぞれ違っていても編集者のもとに統一されていてまとまった語法で記されたものに、九州方言学会の「九州方言の基礎的研究」（風間書房刊）や、平山輝男編「伊豆諸島方言の研究」（明治書院刊）がある。また、楳垣実編「近畿方言の総合的研究」（三省堂刊）もこれに近い。

本稿は複雑な方言形を持つ兵庫県下各地を統一した形で語法調査

を試みたいと思ってその基準を「日本方言の記述的研究」（国立国語研究所編・明治書院刊）の〝兵庫県高砂市伊保町（旧印南郡伊保村）。（和田実氏担当）（以下「記述的研究」と略す）に求めた。

「記述的研究」によったのは高砂市が播州ことば、兵庫県方言の代表ともいうべきものであり、この「文法」の項は「なるべく文部省『中等文法』の説明体系に従ってよいものは従う」という態度である。活用形の立て方や助動詞・助詞の扱いも「中等文法」に従っているのは他との比較もし易いと思ったからである。

本稿末の「文例調査」は「近畿方言の総合的研究」との比較である。

調査地点

兵庫県佐用郡上月町は兵庫・岡山の県境にあり、赤穂市・赤穂郡の北にある。国鉄姫路駅から姫新線で約一時間。佐用郡佐用町の西である。上月駅の西は岡山県英田郡作東町の「美作土居」駅である。この線は岡山県津山市に出る。

当地の方言を調査したものは種々あるが、アクセントは山名邦男氏「幕山村のアクセント」（音声学会報31号）や、虫明吉治郎氏「岡山県アクセント」に見られる通り、近畿アクセントと中国アクセントの境界線の通っているところである。

語彙については鏡味明克氏の「拾遺国境方語地図」に見られるようにこれまた両方言の境といえる地域である。

筆者は兵庫県佐用郡調査を行なったのは今回が五回目になる。第一回は昭和三十三年八月、本学学生六名とアクセント・語彙・語法を郡内十六地点について。第二回は三十五年八月、語法を中心に三日月町・佐用町・上月町を筆者一人で、第三回は三十九年八月、本学学生四名と郡内十二地点、岡山県側十四地点のアクセント・語彙・語法を、第四回は四十六年八月、本学学生六名、甲南大学学生二名と郡内十地点・岡山県側十二地点の語彙調査。そして、今回五十一年八月、筆者一人で上月町の語法を行なった。

前四回の結果の内、学生参加のものはそれぞれの卒業論文に記されている。これらも今回、本稿で折にふれ記すことにする。

先の四回は県立佐用高等学校の野村彦三教諭を中心に同校のお世話で被調査者の多くをご紹介頂いた。

今回は上月町町長中川嘉一氏（本学英文学研究室中川まや子助手の厳父）によって役場の方々のお世話になった。ここに記して厚く感謝の意を表する。

上月町の「町勢要覧」から次のものを転記する。

上月町のおいたちと将来

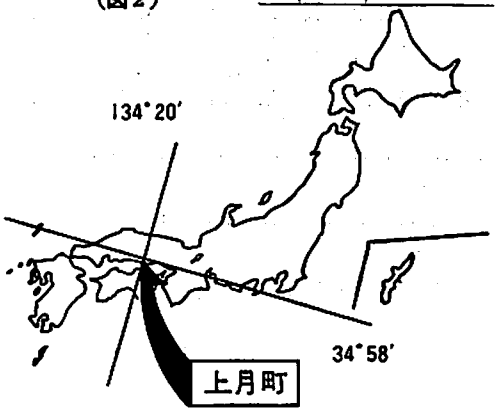
上月町は昭和三十年三月二十五日西庄村と幕山村が合併して発足したが、昭和三十六年六月十五日更に久崎町との合併を行ない新しい上月町となった。

通通信網の整備された都市近郊的な近代農村として住宅化が進み、阪神播磨の新鮮な食料供給の地としてまた健全な余暇をすごす楽しいレジャー地域として発展が期待される。

位置・面積

面積		91.06km²
広ぼう	東西	7.4km
	南北	12.5km
海抜	最高	446.0m
	最低	80.0m

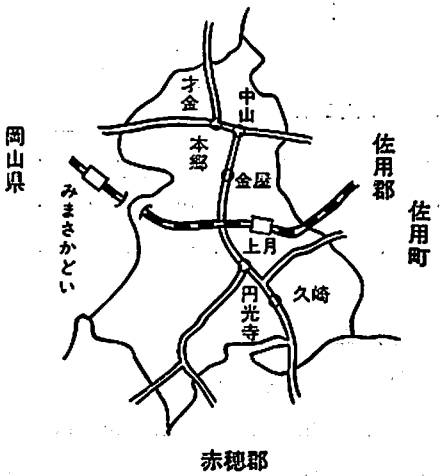
（図2）



なお、土地利用の面では町の七八・九パーセントが山林、九・五パーセントが田畑、一・四パーセントが原野で、宅地は一・〇パーセントである。

その他、河川、道路が九・二パーセントである。

（図1）　佐用郡上月町



本町は大平山上月城を中心に、古くより交通戦略の要所であったところで町名も「上月城」の由来によって定められたものである。

産業は農業を主体として行なわれ養蚕、薪炭、畜産業が副業となっていたが、経済社会の変動につれて大きく変わりつつある。

現在町の北部と横断する中国縦貫自動車道が開通し、南北を縦新する国鉄智頭線も工事中である。これらが完成されたときは交

人口世帯数

人口及世帯数の推移

区分 / 年次	世帯数	人口 総数	人口 男	人口 女	増減人口	人口密度
35.10.1（国勢調査）	1,910	9,252	4.467	4,785	△ 1,050	101.6
40.10.1（〃）	1,798	7,987	3.796	4,191	△ 1,265	87.7
45.10.1（〃）	1,770	7,155	3.373	3,782	△ 832	78.6
48.4.1（推計）	1,799	7,276	3.456	3,820	121	79.9

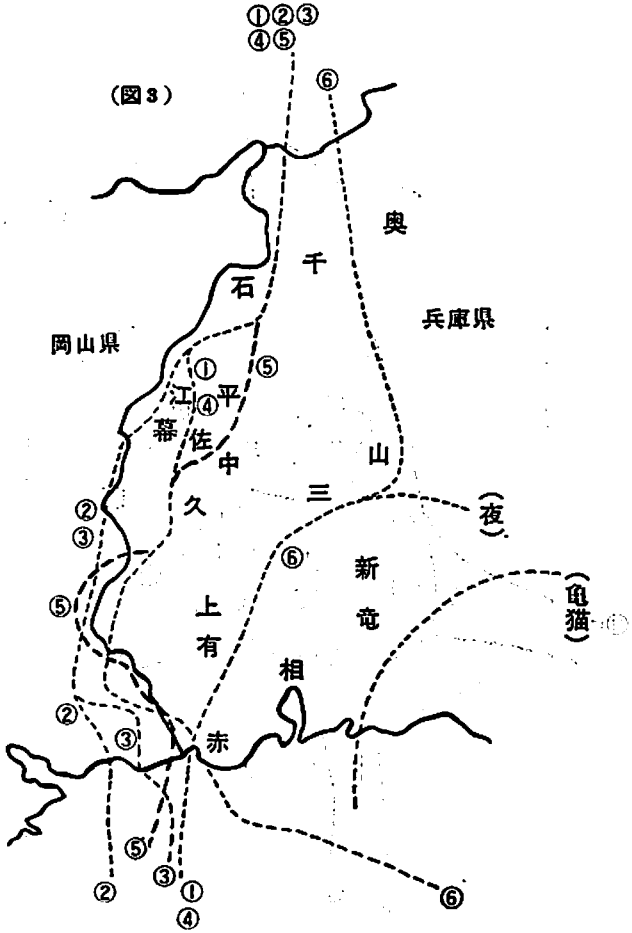
人口動態

区分 / 年次	自然動態 出生	自然動態 死亡	自然動態 増減	社会動態 転入	社会動態 転出	社会動態 増減	増減人口
昭 33	164	87	77	294	470	△ 176	△ 99
35	147	109	38	239	488	△ 254	△ 216
40	90	82	8	187	353	△ 166	△ 158
45	78	88	△ 10	267	321	△ 54	△ 64
47	65	75	△ 10	311	343	△ 32	△ 42

産業別人口（国勢調査）

産業別		第一次 農業	第一次 林漁業	第二次 鉱業	第二次 建設業	第二次 製造業	第三次 卸小売業	第三次 金融保険業	第三次 不動産業	第三次 運輸通信業	第三次 電気ガス水道業	第三次 サービス業	第三次 公務	その他	合計
昭40・10・1	人口	2,493	7	192	621	327	32	189	4	304	71	5	4,245人		
	比率(%)	58.4	0.2	4.6	14.6	7.8	0.8	4.5	0.1	7.2	1.7	0.5	100.0		
昭45・10・1	人口	1,976	14	241	854	360	40	231	6	350	83	4	4,159人		
	比率(%)	47.5	0.3	5.8	20.5	8.7	1.0	5.6	0.1	8.4	2.0	0.1	100.0		

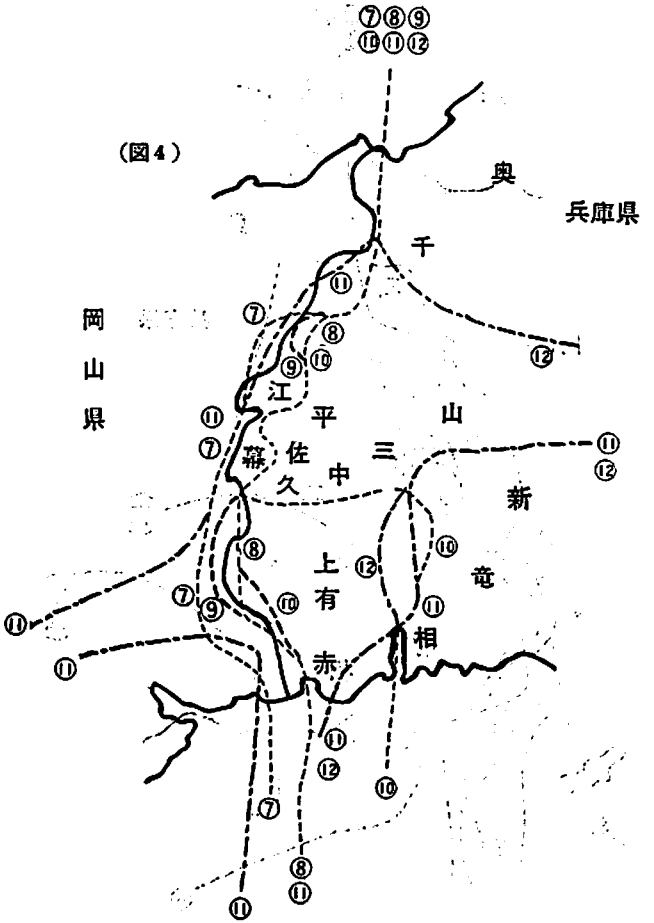
（図３）



奥——奥　谷	佐——佐　用	山——山　崎
千——千　種	中——中　安	三——三日月
石——石　井	○久——久　崎	新——新　宮
江——江　川	赤——赤　穂	竜——竜　野
平——平　福	上——上　郡	相——相　生
○幕——幕　山	有——有　年	

虫明吉治郎氏「岡山県のアクセント」より
拙稿「兵庫県方言研究概観」（甲南女子短大論叢第二号）に作図
○印幕山，久崎が上月町

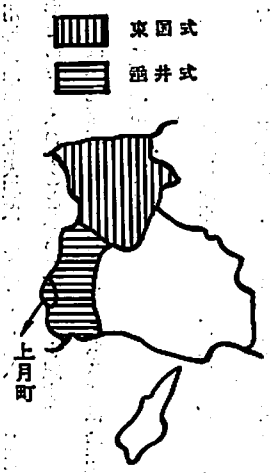
（図4）



	岡山側	兵庫側		岡山側	兵庫側
①一音節名詞第三類	$\overline{○}$△	○$\overline{△}$	⑦三音節名詞第四類	○$\overline{○○}$|	○$\overline{○}$○
②二音節名詞第二類	○$\overline{○}$|	$\overline{○}$○	⑧二音節四段動詞第一、二類	$\overline{○}$○	○$\overline{○}$
③二音節名詞第三類	○$\overline{○}$|	$\overline{○}$○	⑨三音節第四段動詞第二類	○$\overline{○}$○	○$\overline{○○}$
④二音節名詞第四類	$\overline{○}$○	○$\overline{○}$ ○$\overline{○△}$	⑩四音節第一段動詞第二類	○$\overline{○○}$○	○$\overline{○○}$○
⑤二音節名詞第五類	$\overline{○}$○	○$\overline{○}$ ○$\overline{○}$|	⑪三音節形容詞第一類	○$\overline{○○}$	○○○
⑥二音節名詞海「」	$\overline{○}$○	○$\overline{○}$ ○$\overline{○}$|	⑫三音節形容詞第二類	○$\overline{○}$○	$\overline{○}$○○

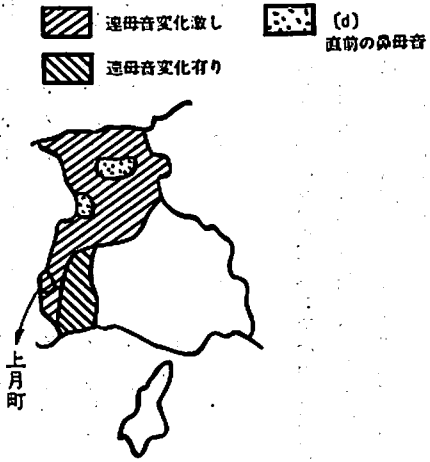
（図6）

アクセント地図



（図5）

音韻地図



「国語学辞典」より

このように広域な地をもつ上月町に人口は僅か三千数百人である。（図5）に示した北の才金から南の久崎に至る。各地の間のアクセントの相違は（図3）（図4）の通りであるが、語法上の相違は殆どないようである。

今回の調査でも才金、円光寺、久崎のそれぞれの地の人について行なった。

動詞

動詞の活用形を、否定形・意志形・連用形・音便形・終止形・命令形とする。

連体形は終止形と同形であるので省く。

否定形はン・ヘンに続く形。意志形は学校文法で未然形の一つになるものであるが、これに意志の助動詞ウ・ヨウが融合した形、従ってウ・ヨウの融合したものを長音で表わすこともある。連用形はマス・タイに続く形。音便形はテ・タに続く形。一段活用・変格活用では連用形・音便形が同形になる。仮定形はいわゆる仮定形にバを融合した形。命令形はいわゆる命令形であって、実際には連用形を用いて命令を表わす場合がある。ヨハ行キのように。ただし、

これは、連用形の中の命令表現機能であるとして、これとは別に「行ケ」の形で命令を表わすことがあればこれを記す。

「表」中△印は「記述的研究」と異るものである。は播州方言の代表ともいうべき高砂市と比較である。

行	例	否定形	意志形	連用形	音便形	終止形	仮定形	命令形
カ	書ク	△ケ	コ(ー)	キ	イ	ク	△キャ	ケ
ガ	泳グ	△ゲ	ゴ(ー)	ギ	イ	グ	△ギャ	ゲ
サ	出ス	△セ	ソ(ー)	シ	シイ	ス	△シャ	セ
タ	打ツ	△テ	ト(ー)	チ	ツ	ツ	△チャ	テ
ナ	死ヌ	△ネ	ノ(ー)	ニ	ン	ヌ	△ニャ	ネ
バ	飛ブ	△ベ	ボ(ー)	ビ	ン	ブ	△ビャ	ベ
マ	読ム	△メ	モ(ー)	ミ	ン	ム	△ミャ	メ
ラ	走ル	△レ	ロ(ー)	リ	ッ	ル	△リャ	レ
ワ	歌ウ	△エ	オ(ー)	イ	ト	ウ	△ヤァ	エ

否定形は、書ケヘン、泳ゲヘン、出セヘンである。これは兵庫県では但馬をはじめ北西部を占める形で、先にあげた（図5）の「連母音変化激し」とほぼ一致する地域の形である。「記述的研究」の高砂市では、書カヘン、泳ガヘンである。

当地では不可能は、書カレヘン、泳ガレヘンである。

拙稿『近畿・中国両方言境界地帯における否定・不可能表現』（『甲南国文第一三号』）の県北西部の否定・不可能表現では次の通りである。

「居る」

〔否定〕

オラン　津山（岡山県）、智頭（鳥取県）、若桜（鳥取県）山崎（宍粟郡）

オラヘン　山崎、引原（宍粟郡）、赤穂市

オレヘン　上月（佐用郡）、引原、粟父（粟父郡）、竹野（城崎郡）、出石（出石郡）他に淡路島の由良・福良、仮尾、安平、釜口

オレヘナー　由良

〔不可能〕

オレン　津山、智頭、若桜

オレレン　津山、智頭

オレーヘン　上月、引原、赤穂、福良

オレレヘン　粟父、八鹿（粟父郡）、出石、由良、福良、釜口

オレレーヘン　竹野、福良

オレラナー　由良

オラレヘン　山崎、引原、仮尾、安乎

オラレーヘン　赤穂

ワ行五段「言ウ」の否定は、イエヘン、ユエヘン、不可能は、イエーヘン、ユエーヘンの併用。

意志形は、「書コオモテ（書こうと思って）」と「書コーオモテ」との併用。

音便形で、サ行イ音便になるもの、ならないものについて調査したが、二十才代の芳原氏でも、「記述的研究」にあげられた語すべてがイ音便になるという。

刺ス・荒ス・浮カス・写ス・起ス・落ス・下ロス・隠ス・返ス・崩ス・殺ス・探ス・残ス・外ス・放ス・干ス。

イでなくエになるもの、出エテ、灯エテのようになるものは、遊ス・押ス・寝ス・サマス・流ス・直ス・ヒヤスである。

右のエ音便になるもので×印をつけた語は「記述的研究」ではイ音便にならぬとしたものである。即ち、高砂市でイ音便にならないものは、上月町でエ音便になっている。これらのいずれにしても語はイ音便にはなり難いという性質があるのだろうか。

仮定形は、書キャーエエノニのように、泳ギャ・出シャ・読ミャの形になる。高砂市では、書カ、泳ガ、出サとなっている。上月町の南、赤穂市の老年層では、書キャとなり、若年層では書イタラ、泳イダラになっている。

上一段活用

行	例	否定形	意志形	連用形	終止形	仮定形	命令形
カ	起キル	△キ(ー)	△キヨ	キ	キル	△キリヤ	キヨ
ガ	過ギル	△ギ(ー)	△ギヨ	ギ	ギル	△ギリヤ	ギヨ
ザ	綴ジル	△ジ(ー)	△ジヨ	ジ	ジル	△ジリヤ	ジヨ
タ	落チル	△チ(ー)	△チヨ	チ	チル	△チリヤ	チヨ
ナ	似ル	△ニ(ー)	△ニヨ	ニ	ニル	△ニリヤ	ニヨ
バ	延ビル	△ビ(ー)	△ビヨ	ビ	ビル	△ビリヤ	ビヨ
マ	見ル	△ミ(ー)	△ミヨ	ミ	ミル	△ミリヤ	ミヨ
ラ	下リル	△リ(ー)	△リヨ	リ	リル	△リリヤ	リヨ

否定形は、起キヘン・起キーヘンの併用。イクラ起コシテモ、起キヘン、起キーヘン。

語幹が一音節のものはヘンに続くとき長音になる。似ーヘン、見ーヘンなど。

不可能は、起キラレヘン、綴ジラレヘンである。

意志形は、連用形に助動詞「よう」のついた形であるが、「記述的研究」の、起キロ、綴ジロに対するものとして、起キヨ・綴ジヨの形をあげておく。

命令形は「ヨ」になる形が、起キィヨで、時には、「起きよう」の窓からと思われるが命令形に使い「起キロー」から「起キロ」になる。高砂市は連用形と同形である。

下一段活用

行	例	否定形	意志形	連用形	終止形	仮定形	命令形
ア	植エル	△エ(ー)	△エヨ	エ	エル	△エリャ	エヨ
カ	受ケル	△ケ(ー)	△ケヨ	ケ	ケル	△ケリャ	ケヨ
ガ	逃ゲル	△ゲ(ー)	△ゲヨ	ゲ	ゲル	△ゲリャ	ゲヨ
サ	戴セル	△セ(ー)	△セヨ	セ	セル	△セリャ	セヨ
ザ	混ゼル	△ゼ(ー)	△ゼヨ	ゼ	ゼル	△ゼリャ	ゼヨ
タ	育テル	△テ(ー)	△テヨ	テ	テル	△テリャ	テヨ
ナ	重ネル	△ネ(ー)	△ネヨ	ネ	ネル	△ネリャ	ネヨ
バ	闘ベル	△ベ(ー)	△ベヨ	ベ	ベル	△ベリャ	ベヨ
マ	集メル	△メ(ー)	△メヨ	メ	メル	△メリャ	メヨ
ラ	呉レル	△レ(ー)	△レヨ	レ	レル	△レリャ	レヨ

各活用形とも上一段活用と同様である。否定形は、植エヘン・植エーヘンであるが、長音になる方が多い。不可能は、植エラレヘンである。

カ変・サ変

語	否定形	意志形	連用形	終止形	仮定形	命令形
来ル	△コエヘん キヘん コラレヘん	コオ	キ	クル クな	△クリャ	コイ
為ル	△セエヘん シヤヘん サせヘん サれる	ショオ	シ	スル スな	△スリャ	セエ

ひらがなは接続する助詞・助動詞の例。

カ変の否定形では、コエヘん、が最も普通で多い。サ音の否定形は、セエヘん、が多く、シャヘん、は少ない。

終止形で禁止をあらわすときは、クルな、クな、の併用である。

形容詞

型	例	語幹形	推量形	連用形	音便形	終止形	仮定形
アイ型	長イ	ナガ	ナガカロ	△ナゴ	ナガカッ	ナガイ	△ナガケリャ
アイ型	赤イ	アカ	アカカロ	△アコ	アカカッ	アツイ	△アカケリャ
イイ型	惜シイ	オシ	オシカロ	△オシ	オシカッ	オシイ	△オシケリャ
ウイ型	暑イ	アツ	アツカロ	△アツ	アツカッ	アツイ	△アツケリャ
特殊 無イ		ナ	ナカロ	△ノオ	ナカッ	ナイ	△ナケリャ
特殊 良イ		ヨ	ヨカロ	△ヨオ	ヨカッ	エイ	△ヨケリャ

推量形は、ナガカロ、アカカロ、の形もあるが、これはむしろ少なく終止形に「ダロ」がついて、ナガイダロ、アカイダロの方が一般的である。「良イ」は、エエダロである。

連用形は、ナゴナル、アコナル、（無）ノオナル、（良）ヨオナルである。

仮定形は、ナガケリャ、アカケリャである。高砂市は、ナガケラ、アカケラである。

形容動詞

語	語幹形	連用形	音便形	終止形	仮定形
静カナ ジャ	シズカ	シズカニデ	シズカダッ△	シズカジャ ダ	シズカナラ

指定助動詞に「ジャ」「ダ」の併用地域であるが、形容動詞も「ジャ」と「ダ」との併用である。

「語」にあげた「静カナ」は、終止形と同じく、今日ワシズカナなあ、のように近世語的な、形容動詞「ナ終止」の形がある。

音便形は、シズカダッタとか、シズカダッタラなどとなる。「記述的研究」の高砂市では、丈夫ヤッタと、丈夫ダシタと二つの形をあげている。これは、ヤッタの地域で、丁寧のデスがダシタになったものである。

終止形は、「ナ終止」のほかに、ジャとダとがある。

高砂市では、ナとジャのほかにダスとダ（ア）とがあるが、ダスはデス、ダスのくずれた形でダ（ア）となったものだろうか。高砂市には指定助動詞はヤとジャとがあるようだ。

助動詞

特徴ある助動詞について記す。活用形の種類を「記述的研究」と同じ形にするが、そこには、将然形としているものを本稿では、動詞・形容詞などと同じく、意志形とする。

動詞の否定形に接続する助動詞

語	意味	活用の型	否定形	意志形	連用形	音便形	終止形	仮定形	命令形
ス	使役	動詞五段	△セ	ソ	シ	△シ	ス	△シャ	セ
レル	受身	〃 下一	レ	レロ	レ	レ	レル	△レリャ	レ
レル	可能自発	〃 下一	レ		レ	レ	レル	△レリャ	
ン	打消特殊				ズ△	ナイ ナン	ン	△ニャ	
ヘン	〃	〃				ヘナン	ヘン	ヘナ	
マイ	打消無変化						マイ		

ス…否定形は、書カセヘンとなる。高砂市では、書カサヘンであ

る。音便形で、高砂市ではイ音便があり、書カイテとなるが、当地にはそれがない。仮定形は高砂市で、サとなるが当地では、書カシャエエのようになる。レルの仮定形も当地ではレリャとなるが、高砂市ではレラである。

ン…連用形は、勉強モセズ・連勁モセズ一日中ゴロゴロシトルのようになる。音便形、ドコエモ行カイデ。行カナンデ。仮定形、行カニャ行カンデモエエとなるが、高砂市ではナとなる。

ヘン…高砂市では連用形にヘズの形があるが当地では見られなかった。音便形のヘナンはカ変についた場合、キイヘナンダ、コエヘナンダとなる。仮定形はコエヘナショーナイ（来なければ、しょうがない）

マイ…高砂市では、フグダケワ食オマイナのように将然形（意志形）につくので「記述的研究」ではここに入れているが、当地では、行クマイのように終止形につく。

助詞の連用形に接続する助動詞

語	意味	活用の型	否定形	意志形	連用形	音便形	終止形	仮定形	命令形
タイ	希望	形容詞		タカロト△		タカッタイ		タケリヤ△	
マス	ていない	五段動詞	マヘ	マホ		マシ	マス		
ヨル	つつある	〃	ヨレ△	ヨロ	ヨリ	ヨッ	ヨオル	ヨリヤ△	ヨレ

ヤガル									
クサル	やがる								
サラス	さらす	〃	五段動詞	〃					
		ヤガレ△	クサレ△	サラセ△	ヤガロ	クサロ	サラソ	ヤガリ	クサリ	サラシ	ヤガッ	クサッ	サラシ	ヤガル	クサル	サラス	ヤガリヤ△	クサリヤ	サラレヤ	ヤガレ	クサレ	サラセ

タイ…意志形の、行キタカローは当地ではあまり用いないで行キタイダローの形になる。連用形の行キトナッタはあるが、高砂市のタカリの形は聞かれなかった。仮定形はタケリャである。高砂市はタケラである。

ヨル…行キョレヘンとなる。高砂市はヨラである。このヨルには上位語の活用行に応じて三種になることは、赤穂市と同様である。「播州赤穂方言の研究語法篇」の「助動詞の項（島田勇雄氏担当）」にある通りである。

① カ・ガ・サ・ザ・タ・ダ・ラ・バ行――イッキョル・クサッショル・打ッチョル・走ッリョル・飛ッビョル・起ッキョル・落ッチョル・打ッチョル（但し、着ヨル・来ヨル・為ヨル・ショル）

② ナ・マ行――去ンニョル・飲ンミョル（但し、煮ヨル・見ヨル）

③ ワ行――笑イヨル・歌イヨル

当地ではヨーと長音の形で用いられる方が多い。

オ前イマ何ションナ（どんな仕事（勤務・職）をしているのか）

とたずねると答えとして、役場エイッキョンジャ（役場に勤めているのだ）となる。中学生ノ頃ハ　イタズラショッタモンジャなど。

仮定形はヨリャであるが高砂市ではヨラとなる。

クサル・ヤガル…何シクサル、何シャガル。ナンニモシクサレヘンのようになる。サラスはごく少ないという。

高砂市にある行キトミナイ（行きたくない）の形はない。

動詞の音便形に接続する助動詞

語	意味	活用の型	否定形	意志形	連用形	音便形	終止形	仮定形	命令形
タ	過去・完了	特殊					タ	タラ	
トル	ている	五段動詞	トレ	トロ	トリ	トッ	トル トオ	△トリャ	トレ
トク	ておく	〃	△トケ	トコ	トキ	トイ	トク	△トキャ	トケ
タル	てやる	〃	△タレ チャレ	タロ チャロ	タリ チャリ	タツ チャッ	タル チャル	△タリャ チャリャ	タレ チャレ
テクル	てくる	カ音	△テコ テケ	テコオ	テキ	テッ	テクル	△テクリャ	テコイ
テク	ていく	〃	△テケ	テコ	テキ	テ	テク	△テキャ	テケ

タ…ワ行五段活用の「食う」「持つ」「思う」は、クータとクタ、オモータとオモタのようにウ音便と略音便になる。「持つ」はモッタとモタの形になる。

トル…否定形は、シトレヘンの形になる。高砂市ではトラである。

ヨルと同じくオ前今何シトンナ（何をしているのか）と何シトンジャに対して役場エイットンジャとなる。

タル…「てやる」の意のタにはチャルとなることの方が多い。シチャレヘン（してやらない）、シチャロカ（してやろか）シチャッタ（してやった）の形になる。

テクル…オートバイデ飛バシテコオカ、飛バシテキタ、飛バシテクリャエエノニ。のような形になる。

動詞の終止形に接続する助動詞

語	意味	活用の型	意志形	連用形	音便形	終止形	仮定形	他の品詞の形容詞	他の品詞の形容動詞	他の品詞の体言・助詞
ネン	のだ	無変化				ネン ネ		終止形に	終止形に	体言・助詞の一部に
ソオナ	伝聞	形容動詞		ソオニ		ソオナ		〃	〃	〃
ヨオナ	ようだ	〃		ヨオニ		ヨオナ		〃	〃	〃
ラレイ	推定	形容詞			ラレカッ	ラレイ		〃	語幹に	〃
ジャ	断定	形容動詞	ジャロ		ジャッ	ジャ				
ダ	断定	形容動詞	ダロ		ダッ	ダ				

断定はジャとダと両方があること以外は高砂市と同様である。

ネンは当地ではあまり聞かない。何スルネン・何スンネン（何をするのだ）など。

ジャ…行クンジャ・スルンジャなどは、行くのだ、の「の」がンになったものであろう。

助　詞

特徴ある助詞について記す。

第一類

ノ・ノン…「の・のもの・のは」などの意

コレオ前〔ノ〕ノンカ？　サッキ来た〔ノ〕ンノ誰？

エ…「へ」の意

高砂市では、役場イ来タラのようにイとなるともに、イサシテとなって、田ンボイサシテ薬マイタとなるようだが当地ではイでなくエであり、エサシテの形もない。

ヨカ…「よりも」の意

コレヨカアレガエエ。赤穂市では、この場合に、コレシカアレガエエのようにシカで「よりも」の意をあらわすが当地にはこのシカはない。

オ…「を」の意の助詞は省くことが多く、本〇買ウ、酒〇飲ムのようになる。特に強める場合には入れる。

第二類

テ…敬語法

高ーテ手がトドカンのような接続助詞としての用法のほかに、このテで敬語を表わすときがある。播州方言の敬語として広く用いられているものである。

先生本読ンドッテヤ、字ー書イトッテヤ（読んでいらっしゃる・書いていらっしゃる）、アンタ知ットテカ。（知っていらっしゃる？）

過去形としては、書イトタッタ（書いていらっしゃった）となる。

サカイ…「だから」の意

明日行クサカイ、行クサケ、行クサケイの形になる。高砂市では更にこれが、ハケ、ハカイ、ハケニ、ハケン、カイニ、カイともなるようだが、当地ではこの形は見られなかった。

原朗氏「播州方言の助詞」（「国文学論叢第四号」神戸大学国語国文学会）によると、その中、サケンが最も多く用いられていて、高砂方言の代表的なものと考えられるとのことである。

第三類

サエ…「さえ」、原朗氏の先の論文で、高砂市では「蚊さえいなければ」のような用法はなく、「カーガ……」と強調するのが普通

で、他に「さえすれば」の意でサエスラがあり、アイツワ　ヒマガ有ッテサエスラ寝トルの用法があるということだが、当地ではサエスリャの形になる。

カテ…「でも」の意

ソレ位ノコトワシカテ知ットル。高砂市ではこのカテのほかにカトテもあるというが当地では聞かれなかった。

ド…「か」の意、

誰ドニ尋ネテミ、ナンド食タカ

ナラ…「ながら」の意

高砂市では、三人ナラ戦死シテモテンのような用法があるというが、当地では、聞いたことはあるが、今回の被調査者たちは使わないということであった。

ナリ…「のまま」の意

原氏の用例で、ミカン皮ナリ食ウ。会社エ行クナリエライオコラレテ。寝タナリヒト月ホド動カレモ出来ヘン。の三例とも当地でもある。

第四類

カ…問いかけ

当地では、問いかけはカである。高砂市ではカも用いるが、モー誰モ来ヤヘンノコーのようにコの方が土語感があるという。これが赤穂市ではケーとなる。

高砂市では、待チンカとなるが当地では待タンカである。

ナ…禁止

「来るな」「するな」はクナ、スナとなる。

ナ…勧め

モー寝ナイヨとイを添える。(多少ていねいな気持がある)

ナ…感慨的

寒イナーとなる。高砂市ではこの場合ノーとなるが当地はナーである。

カイエ…疑問

ソレ　ホンマカイエー。高砂市ではこのエ、エーで強い疑問・詠嘆を表わし女性的であるという。

ドコカンダン（かんだのか）足エー。ヤーソーエー（まあ、そうですか）

なお、赤穂市で盛んに使われている、ソンナモン知ランワーレ。ソンナモン知ルカーレ（知っているものか）のワーレ、カーレは当地にはない。

×　×　×

楳垣実編「近畿方言の総合的研究」（三省堂）にある県下各地の文例調査と比較すると次の通りである。

①雨(が)　降っている　から、　傘(を)　差して　行きなさい　よ。

アメガ　フリヨル　ケエ、　カサ　スェエテ　イキナイ　ナ。(温泉町)

アメ　フットル　シキャア、　カサ　サシテ　イキニャア　ナ。(豊岡市)

アメガ　フットル　デ、　カサ　サイテ　イキナ　ヨ。(和田山町)

アメ　フリヨル　サカイ、　カサ　サシテ　イキヨ。(神戸市)

アメガ　フッリョッ　サカイ、　カサ　サシテ　イッキョ。(高砂市)

アメ　フッヨウ　デ、　カサ　セーテ。　イケヨ　(上月)

②そうだ、　そうだ、　そのほうが　よいだろう　な。

ソオダ　ソオダ。　ソノホオガ　エエダラア　ナ。(温泉町)

ソオダ　ソオダ。　ソノホオガ　エエダラア　ナ。(豊岡市)

ソオヤ　ソオヤ。　ソノホオガ　エエヤロオ　ナア。(和田山町)

ソオヤ　ソオヤ。　ソノホオガ　エエヤロ　ナ。(神戸市)

ソオヤ　ソオヤ。　ソノホオガ　エエヤロ　ナ。(高砂市)

ソオジャ　ソオジャ　ソノホオガ　エエダロオ　ナ。(上月)

③こんな　天気では、　そとへ　出たくても　出られん　じゃないか。

コンナ　テンキジャア、　ソトニ　デタアテモ　デラレンジャ　ニャアカ。(温泉町)

コニャアナ　テンキダッタラ、　ソトエ　デタアテモ　デラレレヘンダ　ニャアキャ(豊岡市)

コンナ　テンキデワ、　ソトエ　デトーテモ　デラレヘンジャ　ナイカ。(和田山市)

コンナ　テンキヤッタラ、　ソトイ　デトオテモ　デラレヘンヤ　ナイカ。(神戸市)

コンナ　テンキヤッタラ、　ソトイ　デトオテモ　デラレヘンヤ　ナイカ。(高砂町)

コネーナ　テンキジャ　ソトエ　デトーテモ　デラレン　ガナ。(上月)

④焼鳥(を)　食って、酒(を)飲んで、半日
遊んでしまった　そうだ。

ヤキドリ　クッテ、サケエ　ノンデ、ハンニチ
アソンデシマッタ　サアナ。　（温泉町）

ヤキトリ　クッテ、サケ　ノンデ、ハンニチ
アソンジャッタ　サアデ。　（豊岡市）

ヤキトリ　クッテ、サケ　ノンデ、ヒナカ
アソンジモタ　ソオダワイ。（和田山町）

ヤキトリ　クテ、サケ　ノンデ、ハンニチ
アソンデモタ　ソオヤ。　（神戸市）

ヤキドリ　クテ、サケ　ノンデ、ハンニチ
アソンデモタ　ソオヤ。　（高砂市）

ヤキトリ　クウテ　サケ　ノンデ、ヒナカ
アソンデシモタ　ソオナ。　（上月）

⑤それは　そうでございましょうけれど、もう一度
考えてみて　下さいませんでしょうか。

ソリャア　ソオデショオケド、　モオイッペン
カンガエテミテ　オクレマヘンキャアナ。　（温泉町）

ソリャ　ソオデヒョオケド、　マアイッペン
カンガエテミテ　オクレマヘンデヒョオカ。（豊岡市）

ソリャ　ソヤケド、　モオイッペン
カンガエテミテ　モラエマヘンカ。　（和田山町）

ソラ　ソオデッシャロケド、　モオイッペン
カンガエテミテ　モラエマヘンヤロカ。　（神戸市）

ソラ　ソオデッシャロケド、　モオイッペン
カンガエテミテ　モラワレシマヘンヤロカ。（高砂市）

ソリャ　ソオヤケド　モオイッペン
カンガエテミテ　モラエエヘンダッカ。　（上月）

⑥お早うございます。　さあ、お上り下さいませ。
皆様が　まってらっしゃいますから。

オハヨアリマス。　サア　アガッテオクレエナ。
ミナハンガ　マットンナリマスケエナ。　（温泉町）

オハヨウゴザイマス。　サア　アガッテオクレンスァア。
ミナンガ　マットンナリマスシキャア。（豊岡町）

オハヨオオワス。　マア　アガンナハレナ。
ミンナガ　マットルデ。　（和田山町）

オハヨオサンデス。　マア　アガットクンナハレ。
ミナサンガ　マットッテデッサカイ。　（神戸市）
オハヨオゴザイマス。　サア　オアガンナ。
ミナガ　マットッデッサカイニ。　（高砂市）
オハヨーサン　マァ　アガンナハレ
ミナサン　マットッテデッサカイ。　（上月）

⑦あんなに　ひどい　雨ばかり　降っていただろう。
それだから　行けなかったのだよ。
アゲャアニ　ヒデエ　アメバッカ　フットッタダラア。
ヘジャケエ　イケナンダジャガナ。　（温泉町）
アニャア　ヒデエ　アメバッカシ　フットッタダラア。
ソンダシキャア　イケレヘナンダンダデ　（豊岡市）
アニャア　ヒドエ　アメバッカシ　フットッタジャロオ。
ソジャサキェエ　イケナンダンジャワ。（和田山町）
アンナニ　エライ　アメバッカリ　フットッタヤロ。
ソヤサカイ　イケナンダンヤガナ。　（神戸市）
アナイ　ヒドイ　アメバッカシ　フットッタヤロ。
ソイヤケン　イカレヘナンデン。　（高砂市）
アガイ　ニドエ　ライアメバッカシ　フットッタダェ。
ソヤサカエ　ヨーイケレナンダガナァ。（上月）

⑧考えていても　よい考えも　出ないな。
一度　見に行ってきたら　どうだい。
カンガエトッタッテ　エエカンガエ　デンナア。
イッペン　ミニイテキタラ　ドオダエ。　（温泉町）
カンガエトッタッテ　エエカンガエモ　デレヘンナ。
イッペン　ミイイッテキタラ　ドニャアダエ。（豊岡市）
カンガエトッタッテ　エエカンガエモ　デエヘンワヤ。
イッペン　ミイイテキタラ　ドナイジャイヤ。（和田山町）
カンガエヨッテモ　エエカンガエモ　デエヘンナ。
イッペン　ミニイテキタラ　ドナイヤ。　（神戸市）
カンガエトッテモ　エエカンガエモ　デエヘンナア。
イッペン　ミニイテッタラ　ドナイヤ。　（高砂市）
カンガエトッテモ　エーカンガエモ　デーヘンナ。
イッペン　ミニイッテキタラ　ドガイナラ。　（上月）

⑨赤ん坊を　寝させるのだから、　静かに
　していなくては　いけないよ。
ヤヤコ　ネカセルケエナ、　シズカニ
　シトランニャ　イケンデ。（温泉町）
アカンオヲボ　ネセルンダシキャア、　シズカニ
　シトランニャ　アカンド。（豊岡市）
ヤヤコ　ネカセヨルデ、　オトナショオ
　シトラナ　アカンデ。（和田山町）
アカンボオ　ネサセンネヤカラ、　シズカニ
　シトラナ　アカンデェ。（神戸市）
ヤアコ　ネサスネサカイ、　シズカニ
　シトラナ　アカンデエ。（高砂市）
ヤヤコ　ネカショッサカエ、　オトナシュー
　シトラニャ　アカンデエ。（上月）

⑩去年　もらった　白犬の子が　もう
　こんなに　大きく　なったのだよ。
キョネン　モラッタ　シロイヌノコガ　モオ
　コガエニ　オオキイ　ナッタダデ。（温泉町）
キョネン　モラッタ　シロイヌノコガ　マア
　コニャア　オオキイ　ナッタンダデ。（豊岡市）
キョネン　モラッタ　シロイヌノコガ　モオ
　コネエ　オキュウ　ナッタンジャワヤ。（和田山町）
キョネン　モロタ　シロイヌノコオガ　モオ
　コナイ　オオキ　ナッタンヤデェ。（神戸市）
キョオネン　モオタ　シロインノコオガ　モオ
　コナイ　オオケ　ナッテンデ。（高砂市）
キョネン　モロタ　シロイヌノコガ　モー
　コガイニ　オーキュー　ナッタヤデ。（上月）

右の、温泉町（美方郡）、豊岡市と和田山町（朝来郡）は但馬に入り、県北部である。神戸市、高砂市はともに瀬戸内海に面した南部である。

文例から上月町と他の地点と比較すると次の通りである。

① フッョウは高砂市と同じ、サカイを使わずデを使っているのは和田山町と同じである。セーテは他にはなく温泉町のスェエテに近い。

② ソージャは他にはない。エエダロオのときはジャロオでなくダロオとなっている点、温泉町や豊岡市の北部と同じである。

③ コネーナは豊岡市のコニァナに近い。テンキジャは温泉町と同じ。

④ ヒナカは和田山町と同じ。

⑤ ここではソオヤとヤを使っている。ダッカを使っているのは上月町だけである。

⑥ デッサカイは北の方にはなく、南の神戸市、高砂市と同じである。ここではサカイを使っているから①の場合も使わないこともないのだろう。

⑦ アガイニは温泉町アゲャアニに近い。フットッタダエは他にはない。イケレナンダは豊岡市と同じ。

⑧ カンガエトッテモは南の神戸、高砂と同じ。ドガイナラは他にはない。

⑨ ここでもサカエが出ている。

⑩ モロタは神戸と同じ、シロイヌノコがであってコオがでないのは北の方と同じ。コガイニは温泉町に近い。オオキュウは和田山と同じ。ここではナッタヤデとヤを使っている。

以上により、当地の語法をみるに、文例調査でも、神戸や高砂市と一致することは少なく、和田山や北の但馬の豊岡市や温泉町と一致することが多い。特に動詞五段活用の否定形がエ段になる点、先にあげた（図5）の「音韻変化激し」の地域にほぼ一致する。また指定助動詞ダ、ジャについては、ジャは岡山県や、但馬の東、出石郡にある。

また、否定、不可能表現のレヘンの形は但馬と淡路に通ずるものである。外兵庫的であり、外近畿的である。